

日馬富士インタビュー

生きていくことは楽しいことばかりではない。壁にぶつかったり、辛いことも、悲嘆にくれることも、生まれてきたことを恨む日々さえあるに違いない。

だが一方で、そうしたことから羨ましく、見詰めるしかない子どもたちがいる。生まれながらにして病をもち、不十分な医療環境の中で為すすべもなく死の恐怖に怯える幼き命たち。その大きな壁を壊すことに立ち上がったのがハートセービングプロジェクト(HSP)である。そして、HSPの熱い思いに共感する人々がいる。

大関・日馬富士

日馬富士公平

(はるまふじ・こうへい)

大関・伊勢ヶ濱部屋

本名:ダワーニヤム・ビャンバドルジ

モンゴル・ゴビアルタイ

出身



見渡す限り緑の草原。緑の波、緑の風が押し寄せてくるモンゴル。その首都・ウランバートルで1984年、一人の男の子が誕生した。ダワーニヤム・ビャンバドルジ。後に日本の相撲界に単身飛び込み、2009年に大関となる日馬富士(はるまふじ)関である。父親は軍人であり、モンゴル相撲の大関であり、医者であり、詩人でもある実直な人物で、幼い頃から「人のために尽くす人間となれ」とつねに諭されて育ったという。美術高校に通いながらモンゴル相撲にも熱心に励んだのは父親の影響があったからだろう。伊勢ヶ濱親方にスカウトされ、安馬という四股名で2001年初土俵を踏んだ。幕内最軽量の129キロという体躯ながら、スピードのある攻めで多くのファンを魅了する。日馬富士関がハートセービングプロジェクトと出会い、活動に参加を始めたのは2008年のこと。その時の思いを、彼は次のようにホームページに記している。

「私の故郷のモンゴルの子供たちをハートセービングプロジェクトの先生方がボランティアで診察、治療をしてくださっている事を聞き、大変感激しました。その為の恩返しを少しでもしたいと思い、ハートセービングプロジェクト副理事長の富田先生の病院『昭和大学横浜市北部病院』で、先生の子供の患者さんが心臓移植のために募金活動をしている事を聞いて自分にできることがあるならばと、協力をさせてもらいました。また、私の故郷のゴビアルタイに検診に行っていただけでした。故郷の人々が大変喜んでいました。これからも私でお役に立てることがあれば積極的に協力をしていきたいと思っています」

このように記す日馬富士関だが、その時彼は誰にもうかがい知ることのできない悲しみを胸に秘めていた。2006年、敬愛する父親を交通事故で喪ったのだ。掛け替えのない存在を失った日馬富士関は、少しでも父親に近づこうとするかのように、出身地をウランバートルから父親の生地・ゴビアルタイに改めている。埋めようのない喪失感の中で、甦ったのは父親の言葉であったに違いない。「人のために尽くす人間となれ」と。そして、日本の医師団によるハートセービングプロジェクトの活動は、命の儚さを想い悲嘆に暮れていた日馬富士関の心に、一つの灯火を点したのかも知れない。

このように記す日馬富士関だが、その時彼は誰にもうかがい知ることのできない悲しみを胸に秘めていた。2006年、敬愛する父親を交通事故で喪ったのだ。掛け替えのない存在を失った日馬富士関は、少しでも父親に近づこうとするかのように、出身地をウランバートルから父親の生地・ゴビアルタイに改めている。埋めようのない喪失感の中で、甦ったのは父親の言葉であったに違いない。「人のために尽くす人間となれ」と。そして、日本の医師団によるハートセービングプロジェクトの活動は、命の儚さを想い悲嘆に暮れていた日馬富士関の心に、一つの灯火を点したのかも知れない。

——ハートセービングプロジェクトを知った第一印象は？

事務局で運営に携わっているカメラマンの宇佐美さんと、同郷で幼馴染のトーヤさんから、ハートセービングプロジェクトのことを初めて聞きました。私の故郷であるモンゴルの子供たちのために、こんなに献身的に活動する日本人がいることへの驚きと感謝でした。そして率直に、なぜモンゴル人ができないのか、と悔しくも感じました。

——モンゴルでの医療環境はどんな状況ですか？

モンゴルでは、心臓に先天的な疾患のある子どもの医療は著しく遅れています。また、日本の医療ですぐにできる手術も、モンゴルの厳しい経済状況下ではそれが難しく、短い生涯を終える子どもたちが大勢います。私が姉さんと呼んでいるトーヤさんは、モンゴルでの検診・治療活動に通訳を兼ねて同行していますが、「もう手遅れです、と家族に告げなければならない時が一番辛い」と涙ながらに語っていました。少しでもそうした悲しみをなくすために、私にできることは何でしょうと思いました。

——大関は全ての人に優しいのですが、特に子どもたちには、格別な思いがあるようですね。

私たちアスリートはいろんな人の支えがあって、現在があります。少しでもその恩返しをしたいと、土俵の上で真っ向勝負をしています。その姿を見て、たくさんの方々のファンの方々から、「感動した」「ガンバって」という手紙などが届きます。中には病院に入院している子どもたちからの絵やメッセージもあります。私は相撲の世界では体格に恵まれていませんが、白鵬関など大きな相手にも逃げずに向かっていく姿を通して、挫けない勇気をもってもらえたらと考えています。

——いろんなカタチで、ハートセービングプロジェクトを支える活動を行われていますね。

プロジェクトの副理事長である富田先生の病院に、重度の心臓病と闘う一己ちゃん(1歳)がいました。モンゴルの子供たちの恩返しと思い、病室を訪ねて励ましたり、アメリカでの心臓移植の寄付金を呼びかけたりしました。そのほか、各地の病院を訪れて、難病の子どもたちを励ましています。でも、彼らから一生懸命、治療に取り組んでいる様子を記した手紙などが届くと、本当に励まされるのは私の方なんですよ。

——医師団が出身地であるゴビアルタイに検診に渡航した時は、今までの懸賞金をそっくり寄付されたそうですね。

1回の渡航で300万円から多い時は800万円の費用が掛かると聞いています。すべてが寄付で賄われていますし、お医者さんは持ち出しもあるとか。少しでもお役に立てればと思って。しかし、モンゴルの西の端にあるゴビアルタイまではウランバートルから車で2日間の厳しい行程です。そうした辺境にまで出向いていく医師団の情熱と使命感には、本当に胸を打たれました。

——最後に、ハートセービングプロジェクトの活動についてメッセージをお願いします。

子どもたちには大きな可能性と未来があります。モンゴルだけでなく、日本や世界中の子どもたちの命を救うハートセービングプロジェクトに、これからも、一人でも多くの方が参加していただきたいですね。

<インタビューを終えて>伊勢ヶ濱部屋の土俵の前でインタビューに応じてくれた日馬富士関。取材が終わり、部屋の力士の子どもを抱き上げる姿は慈愛に満ち溢れていた。どの子どもにも幸福に生きる権利があり、命を輝かせて生きることは素晴らしいと無言で語りかけていた。